




# 課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学 籍 番 号 17DC1502  
氏 名 ( 本 籍 ) 劉 黎 ( 中国 )  
学 位 の 種 類 博士 ( 学 術 )  
報 告 番 号 甲 第 109 号  
学位授与年月日 2020 ( 令和 2 ) 年 3 月 20 日  
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当  
論 文 題 目 国境に飛ぶ鳩-近現代日中関係史の中  
の詩人・軍人黄瀛

審 査 委 員  
主査 三好 章   
副査 黄 英哲   
副査 長井 千秋 

2020 ( 令和 2 ) 年 2 月 12 日  
愛知大学大学院中国研究科

## 審査の結果の要旨

標記劉黎学位請求論文『国境に飛ぶ鳩—近代日中関係史の中の詩人・軍人黄瀛』に関し、2019年11月7日、主査三好章、副査黄英哲・長井千秋は予備審査を完了し、本審査への移行を可とする決定を行った。

2020年1月9日、劉黎本人に対する口頭試問を、愛知大学名古屋校舎M406教室において上記主査・副査計三名によって行い、その結果課程博士学位授与の要件を満たしていることを確認した。

### 【審査要旨】

劉黎の学位請求論文『国境に飛ぶ鳩—近代日中関係史の中の詩人・軍人黄瀛』は、内容的には、やや不十分な部分はあるものの、課程博士学位授与の要件を満たしている。

本論文は、黄瀛という稀有な出自を持つ人物を、日中近代関係史の中で考察したもので、詩人としての従来の詩人としての黄瀛の事跡をめぐる先行研究を踏まえつつ、新たな資料を発掘し、またこれまでほとんど研究されることのなかった軍人として黄瀛の事跡を検討している点に、特長を見る。日中双方の先行研究においては、黄瀛の全生涯を通して各時期の主な活動を体系的に整理した研究は管見の限り存在しない。また、各時期における黄瀛の学歴・軍歴を時系列的に整理すること、その時代背景と各時期における黄瀛詩作の特徴との関係、また日中関係史の進展と黄瀛の人生の転換との繋がりなどの諸問題について検討を加えている。さらに、日中戦争終結に関わる動きとして、特に日本の降伏交渉にあたっての黄瀛の役割、戦後国民政府による日本軍人の留用問題などに目を向け、そこには支那派遣軍参謀土居明夫やタイから脱出した辻政信が含まれていた点を指摘するなど、新しい事実を明らかにしている。また、基本的かつ重要な方法論、史料操作に関しては、歴史学の方法と比較文学の方法を併用している。具体的には、日本で掲載された黄瀛の詩作に対するテキスト分析を行うだけでなく、各地の檔案館・公文書館、日中双方の新聞・雑誌・政府公報などの文献資料、画像資料、体験者による口述資料などの史料を活用し、詩と各資料を互いに行き来しながら史実を考証、各時期における黄瀛の学歴・軍歴・主たる活動を検討し、さらに生存している関係者やその周辺への聞き取りを重ねるなど、オーラルヒストリーの手法も取り入れている。もちろん、そうしたオーラル資料に対する文献的考証も忘れてはいない。巻末には詳細な関係年譜を付し、今後の後進による研究の便を図っている。

本論の概要を以下に示す。まず、第一章は、1906年から1925年まで黄瀛の活動を中心に扱う。1906年10月4日、黄瀛は四川省重慶府江北庁における士大夫や教育者を輩出する黄家で生まれた。父親はかつて知県に選抜された清末の拔貢黄沢民であり、母親は千葉県出身で中国に渡り六年あまり、清末四川省の女子教育に尽力した教師の太田喜智である。また、黄瀛の叔父、叔母はいずれも学校を経営した重慶の教育家である。黄瀛が父親を早く亡くしたことと幼年期の大家族生活は、人生の原体験として、彼の人格形成、気質と深くつながっていると考えられる。後に、いち早く黄瀛の優れた才能を発見した荻原朔太郎は、かつて『日本詩人』で黄瀛の詩を高く評価したが、その明るい貴公子風の詩風は、四川の郷土、そして彼の特別な家庭環境に養われたといえる。また、中国近代教育に力を尽くし、後に夫を失った後女手一つで黄瀛兄妹を育てた母親太田喜智も黄瀛に重要な影響を与えていた。1914年、8歳の黄瀛は太田に連れられ来日、千葉県福岡尋常高等小学校に入学した。その後、中国人であるという理由で、成東中学校への進学を拒絶され、1920年神田の正則中学校に入学した。黄瀛はそこで詩の創作に夢中になり、雑誌『詩聖』に作品を発表、同じ号で詩を発表した草野心平と出会った。1923年、関東大震災で正則中学校の校舎は焼失、震災後の不安定な社会情勢もあり、中学校4年の黄瀛は青島日本中学校に転校した。青島にいた1年間、黄

瀛は海港都市青島の風景、中学校生活をテーマに詩作り、『朝日新聞』『日本詩人』で発表した。これらは高村光太郎の目にとり、以後、親交を結ぶこととなる。黄瀛は『朝の展望』により雑誌『日本詩人』（「第二新詩人号」）の詩話会賞・第一席を受賞し、日本詩壇における新進気鋭の詩人となった。1925年3月、青島日本中学校を卒業した黄瀛は憧れの東京に戻り、新たな人生を始めた。

第二章は、黄瀛が1925年3月に東京へ転居してから1930年12月中国への帰国までの活動を中心に扱う。この時期に、黄瀛は第一高等学校の入試に失敗し、結果的に一高進学は断念するものの、浪人生活中に高村光太郎、草野心平らと積極的に交流した。1926年4月、黄瀛は光太郎を保証人とし、お茶の水の文化学院へ入学した。当時の文化学院は与謝野晶子や奥野信太郎らが教員として在籍するなど、日本文化界を代表する文化人・知識人を集めていた。黄瀛は自由主義的で知的な新しい教育環境の中で、教師や同級生らとの緊密な文化交流と文芸実践活動を展開した。その一方で、1927年10月、中国の家族の望みでもあった日本帝国陸軍士官予備学校に入った。陸士卒業後は陸軍軍用鳩調査委員で特種通信技術を学んだ。士官学校や陸軍軍用鳩調査委員での勉学は、黄瀛の軍人生涯の起点となった。黄瀛は後に中国への帰国後、15年の長きにわたり国民政府軍における特種通信技術の確立に尽力、その技術の権威となった。在日中の1925年3月から1930年12月の間、黄瀛は日本詩壇で、また詩の団体・同人誌を拠点に活動した。この時期における黄瀛の文芸活動は、大正デモクラシーの自由な風潮の余熱が続く中、アナーキスト詩誌（『銅鑼』、『学校』など）、プロレタリア詩誌（『文芸戦線』など）、またモダニズム詩誌（『詩と詩論』など）が続々と登場する同人雑誌全盛期の流れに乗り、そこに多数の詩作を発表したのである。これらの詩作には、黄瀛の自由な詩精神が反映され、「シンボリックな抒情性にリアリズムを交織、またユーモラスな即興詩」という異色の創作手法は、日本の文壇の注目を浴びた。さらにこの時期、彼は中国詩の日本語訳を通じ、中国の新しい詩を日本詩壇に紹介、日中文化交流の懸け橋の役割を果たした。

第三章は、1931年から1937年の日中戦争が勃発するまでの間の黄瀛の活動を中心に扱った。1930年12月、黄瀛は日本から中国へ帰国し、国民政府軍政部特種通信教導隊隊長（少佐）に任官し、国民政府特種通信技術の軍事教育の創始者となった。1931年から1937年に日中戦争が勃発するまで、黄瀛の活動は、彼と日本との交流の流れにより、三つの段階に分けることができる。まず最初は1930年12月から1935年7月までである。この間、黄瀛は特種通信教導隊の軍用鳩・軍用犬班を創設し、中国各地で伝書鳩と軍用犬の通信訓練を行った。また、軍隊生活を題材としておよそ70編の詩作を日本の各雑誌で発表している。次は1935年7月から1936年9月までである。この間、黄瀛は国民政府軍事委員会軍事交通研究所教官を兼任し、軍用鳩・軍用犬を用いた特種通信教育の業務に従事、多忙の中で日本での詩作の発表を取りやめ、軍務に専念していた。第三は1936年9月から1937年9月までである。この間、黄瀛は国民政府陸軍通信兵学校（以下、通信兵学校）の創立にともない、通信兵学校特種通信教導隊隊長に任官し、通信兵学校の発足に尽力した。また、1936年9月、彼は特種通信教導隊の将校と来日し、日本の軍用犬界と軍用犬養技術について交流した。帰国後、黄瀛は発起人として、中国における初の軍用犬・警察犬改良組織「中華軍警犬促進会」を創立し、特種通信技術の改良を図った。しかし、日中戦争全面化は日本との連絡を途絶えさせ、盧溝橋事件後の1937年9月には、誤報であるが黄瀛が漢奸として銃殺されたとの噂が日本に広まったが、日本では真偽の程は確認のしようがなかった。その後戦争の進展と共におよそ十年間、日本における黄瀛の消息は途絶えた。日本で多くの詩作を発表した唯一の中国軍人である黄瀛は、詩作に軍隊生活や人生の歩みを記している。つまり、この時期における彼の詩作は文学作品としてだけでなくとどまらず、その生涯と日中関係のあり様を考証する上で重要な史料である。

第四章は、1937年7月から1945年8月までとその後の黄瀛の動向を中心に検討する。1937年11月、日中戦争の進展と共に、国民政府陸軍通信兵学校（以下、通信兵学校）の校舎は湖南省臨澧へ移転した。その後、戦争終結までは通信兵学校の移駐と行動を共にし、各地を転々とし、戦後と内戦期を迎えることとなる。この間の黄瀛の活動は三つの段階に分けられる。まず最初に、1937年

7月から1945年8月終戦の時まで、黄瀛は通信兵学校の軍務のため、湖南、広西、貴州の各地を移動し、特種通信訓練、軍事教育に従事していた。次に、1945年8月終戦後から1949年まで、黄瀛は中国陸軍総司令部少将高級参謀として日本側との交渉工作、戦後の接收工作に参加していた。また、この間に、黄瀛は上海・南京に滞在する日本人、例えば草野心平、名取洋之助、山口淑子の引き揚げに尽力した。そしてその後、黄瀛は日本の降伏交渉の中で再会した草野心平などを通じて詩作の発表を再開し、日本詩壇との交流が回復した。軍人としては「竹舎」と呼ばれた旧支那派遣軍将校らの留用施設で情報収集などの業務を行っていた。そして第三は、1949年の一年間である。黄瀛は少将として貴州に駐屯する国民革命軍第十九兵团四十九軍二四九師団副師団長の任にあった同年12月、内戦の最終段階で部隊を率いて決起し、共産党政権に参加した。先行研究において、黄瀛の日中戦争期以降の多方面にわたる活動に関する研究は特に不足している。その要因は次のように考えられる。まず、日中戦争の起こった後、黄瀛は各地を転々としていたため、彼の活動に関する資料が戦時下の不安定な状態で散佚したいること。また、戦時中は黄瀛の日本の友人たちとの交流が中断されたため、友人との手紙などから彼の活動を検討することが困難なためである。日本の友人たちとの間にある心情的要因もそれに加わる。国交正常化以降、日本各界の人々はそれぞれに黄瀛を訪ねたが、黄瀛自身は文革期の迫害を含め、複雑な要因から自らの体験への具体的な言及を避けていた。また特に、戦時中の黄瀛の陸軍通信兵学校の活動についても、1949年中の活動同様、先行研究はきわめて少ない。

第五章では、1950年から2005年までの間、すなわち中華人民共和国時代に入ってから黄瀛の事跡を追う。特に1966年に始まった文化大革命では、黄瀛は日本側との繋がりのために投獄され、11年間の監獄生活を送った。黄瀛の消息は再度日本で途絶えることになる。1978年1月、黄瀛は四川外語学院の教壇に立ち、日本文学を講じ始めた。この頃、宮川寅雄や陳舜臣らの日本各界の人が重慶に赴いて黄瀛を訪ねた。一方、黄瀛は1984年、1986年、1996年、2000年の都合4度来日し、日本との文化交流に力を尽くした。日中双方の新聞は、黄瀛の来日、心平らの文化人との再会、黄瀛詩碑の落成について報道している。そして2005年、98歳の黄瀛はほぼ1世紀の人生の幕を閉じ、重慶で永眠した。

全体として、時代の波に翻弄されつつ、文学と軍事という一般的には工作することが考えにくい2つの異なる世界で活動した黄瀛の生涯を、本質的に詩人であり、日中両国の血を引くという環境の特殊性の中から、軍人としての公的活動と詩人としての内面の発露とを共存させ、日中交流の架け橋となろうとしたものとして検討した。

本学位請求論文について、口頭試問において主査・副査から大要以下のような指摘があった。

まず、近代日中関係史の中で各方面における重要人物とふれあい、交流を重ねたことから黄瀛個人の枠を越えて日中両者の関係が反映していること、両国の血を引くことによって波瀾万丈とも言ふべき起伏の大きな人生となったこと、さらに黄瀛のほぼ100年にわたる生涯が激動の20世紀日中関係と重なり、それが当然ながらその人生に反映していることを描いた点が一致した評価であった。より具体的には黄瀛の出身背景を明らかにしたことで日本での詩作活動が明確となったこと、さらに生涯の足跡の明示に関しては、従来の黄瀛研究では空白となっていた1936～1945年間の足跡を明らかにし、さらに1949年に到るプロセス、特に貴州蜂起に関しても地方志を活用することで整理したこと、それ以前の汪政権に関係した日本人の引揚げや支那派遣軍将校との交流を明らかにした点は学界に対する大きな貢献と言える。また、満洲事変から日中戦争全面化に至る間、一時的であれ日中軍事交流が行われていたことは、偽書である「田中上奏文」を实在のものとし「15年戦争」論への誤解に基づく「一貫した意図の戦争」論への批判となる実証である。さらに、大正自由主義の影響を色濃く残した文化学院時代の交流が、日中の「かけはし」となり得る可能性を持

ったものであった事への指摘も重要であった。

しかし、文化学院在学中など、日本時代の黄瀛が中国人との文学活動と交わっていないこと、戦前に交流があったのに文革後に4度来日してもあまり話題にならなかった理由などは、言及が不足していた。日本人将校を留用した「竹舎」についても、極めて重要な指摘ながら、共産党の同様のことを行っており比較としては手不足の感は否めない。それは、文革後の日本との文化交流、文学交流における役割が十分に描き切れていない点につながるのではないかと、などの指摘があった。

なお、本論文は史料操作、議論の進め方など大過なく展開されており、指摘のように不十分な点はあるものの、課程博士学位請求論文として一定の水準に到達していると判断できる。口頭試問当日は、主査・副査による質疑に対しても、適切に応答した。

Ithenticateによる盗用チェックについては、11月5日に主査の責任で行い、問題が無かったことを附記しておく。

以 上